



編者について

鮎川哲也（あゆかわ・てつや）

昭和二十五年、処女長編『ペトロフ事件』を
発表。昭和三十一年、講談社の新人長編懸賞
募集に『黒いトランク』が当選。昭和三十五
年、『黒い白鳥』と『憎悪の化石』で第十三
回日本探偵作家クラブ賞を受賞。その後『偽
りの墳墓』『死のある風景』『準急ながら』
『鍵孔のない扉』などの作品を発表。文字通
り本格推理小説の第一人者として熱烈な読者
を持つ。小説以外の作品に『幻の探偵作家を
求めて』『本格ミステリーを楽しむ法』（以上、
晶文社）がある。

あやつり裁判^{さいばん}

幻の探偵小説コレクション

一九八八年三月二五月初版

一九八八年六月一五日二刷

編者 鮎川哲也

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一〇一

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・美行製本

© 1988 Tetsuya AYUKAWA

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

あやつり裁判

幻の探偵小説コレクション

鮎川哲也編



晶文社

ブックデザイン 平野甲賀
表紙イラスト 斉藤昌子

あやつり裁判

幻の探偵小説コレクション

目次

はじめに

霧の夜道 11 葛山二郎

古風な洋服 39 瀬下耽

翡翠湖の悲劇 57 赤沼三郎

あやつり裁判 137 大阪圭吉

蜘蛛 159 米田三星

月下の亡霊 179 西尾正

痲痺性癡呆患者の犯罪工作 197 水上呂理

煙突奇談 219 地味井平造

花粉霧 239 蟻浪五郎

鼻 269 吉野賛十

海底の墓場 293 埴輪史郎

作品解説 364 鮎川哲也

はじめに

先般刊行された『幻の探偵作家を求めて』の読者から、各作家の作品を読みたいという要望が編集部あてに寄せられて、それはかなりの数にのぼったという。殊に、現物に触れたことのない若いミステリー読者にすれば、鰻屋の前をすどおりして匂いだけ嗅がされたようなものだったろうから、舌にのせてじっくりと味わってみたいという思いに駆られるのは当然のことである。そこで編集部のご願いを容れて、一巻のアンソロジーを編むことになった。

理想をいうならば『幻の探偵作家を求めて』に登場した全作家を対象として編纂したいところだが、紙幅の制約を無視することはできないので、今回は十一人に絞った。すでに作品が他社の短篇集に入っている人は、原則としてご遠慮をねがったわけである。なお、今回収録できなかった十名の作品を読みたい方のために、その出版社名とタイトルを次に記しておいた。ご参考までに。

本巻を編むに当って『探偵随想』の秋田稔氏及び若き友人である山前譲、長山裕一両氏の協力を得た。謝意を表します。

本田緒生

街角の文字

光文社文庫『下り「はつかり」』

芝山倉平

電気機関車殺人事件

同

岡戸武平

五体の積木

双葉文庫『怪奇探偵小説集Ⅰ』

六郷一

夜行列車

光文社文庫『下りはつかり』

妹尾アキ夫

恋人を喰う

双葉文庫『怪奇探偵小説集Ⅰ』

深夜の埋葬

講談社文庫『戦慄の十三楽章』

北洋

死の協和音

同

南沢十七

蛭

双葉文庫『怪奇探偵小説集Ⅰ』

橋本五郎

地図にない街

同

平井蒼太

娼指

同

星田三平

せんとらる地球市建設記録

青樹社『新青年 ミステリ倶楽部』

霧の夜道

葛山二郎

葛山二郎（くずやま・じろう）

明治三十五年、大阪に生まれ満洲で育つ。大正十二年に短篇探偵小説「噂と真相」が『新趣味』に入選。県立病院の病理研究所の助手を勤めながら高等工業学校にかよい、その後建築設計士として満洲の兄のもとで働いため一時筆を折る。昭和二年の「股から覗く」をはじめ興趣豊かな十数篇の本格探偵小説を、おもに『新青年』に発表し、四年の「赤いペンキを買った女」は江戸川乱歩に激賞された。これに登場する探偵役の花堂弁護士は八年に発表の本篇にも、また二十三年の「花堂氏の再起」にも登場する、シリーズキャラクターである。

入口の、絨毯の縁につまづいた花堂琢磨弁護士は、よろよろと前にのめって、手にしていた帽子やステッキを投げ出したまま、客間の中央に四つん這いの醜態を演じた。それから彼は、背を屈めて、落した鼻眼鏡の所在を床の上に探りながら、

「どうぞお構いなく、どうぞお構いなく」と繰返した。

「いけないね、其処は！ 私も始終つまづく。どうかしてお貰い……」と主人公の岩城剛一郎検事は物静かに妹を振返った。

「はい」と妹も、物静かに兄へ答えながら、ほうり出された客の帽子とステッキを拾いあげて、

「お負傷は？」と客を見た。

ようやくその時、眼鏡を鼻の上に乗せながら、

「いや、どうも！」と、弁護士は言った。

「つまり、つまづいたから倒れた——と、こう、普通に人は申しますな。ところが、お嬢さん、これは運動の法則を無視した言葉で、つまづいたから重心を失った、重心を失ったから倒れたんです。ね、そうでしょう？ お嬢さん、はっ、はあ！」と、それからまた「いや、どうも！」と繰返した。

「何と、私は！ 御挨拶ぬきで、ずっと奥まで通っちゃいましたよ、私は！」とそう言って、当惑気な検事の鼻ッ先で、弁護士はからからと笑った。笑ったと思うと、またしゃべり始めた。

「私はね、今日のお昼頃にもお宅の表まで伺ったんですが、ち、こ、う伺うには明る過ぎましてね。なにしろ日中ですからね。いや、御免下さい。私の口の利き方は少々乱暴です。少々乱暴ですが、あなたもこうして夜分を選んで、……否、なに、お運びになった訳ではなく、今時分がお暇なのでしょうと承知してはいます。ええ、ええそりゃあもう。よく承知しているんです。お忙しくてお暇のないことはね。ですが、そのあなたも夜分にしてくれと仰言ったということには何の変りもありません。ちやうど、へ、へ、へ、ちやうど、私が昼間では明る過ぎたようにですね。で、実は昼間もお願いに伺ったんですよ。ところが、それ、お天道さまが眼をむいていて、明る過ぎたって訳なんです。何故って、あなた、あなたは検事で、私は弁護士でしょう、こいつは少々具合が悪かろうではありませんか。……へ、へ、へ、どうもねえ、昼間では……」

喋り通した、此奴は！ と嫌悪の情が、あからさまに検事の顔に浮びあがると、弁護士は、すかさず言葉を続けた。

「否、否、否、お腹立には及びませんよ。決して決して、お怒りになるような怪しからんお願いの筋ではないのです。……だがしかし、世の中に裏表があり、一日の間にも夜と昼があるようにです。検事だって、たまには法服を脱いで寛ぐ時があっても好いだろうではありませんか。法定に於ては私と黒白を争う公敵である検事岩城剛一郎氏も、ここでは私と膝を交えた親しい間柄として、愉快的笑顔の一つもお見せになるが好いでしょう。そこが人間の融通の利く所で、物事は総べてこうなくちゃなりませんよ」

と、弁護士は、その時部屋を出て行く検事の妹にち、ら、り、眼を移しながら、ちよいと言葉を句切った

が、困ったような顔をして、検事の前にペコリと頭を下げた。

「これはまあ、私としたことが、初めてお宅へ伺って、しよっぱなから一と騒動、ようやく起上ったかと思うと、矢鱈無性にべらべら喋り通しているとは、驚き入った仕儀ですわい！」と、再びペコリと頭を下げると、今度は幾分、その面持に真面目な、敬虔なところを見せながら、

「実は岩城さん、こうなのですよ。昨夜、湿った霧が街をすっかり包んでいました。今夜もそうです。しかし、昨夜は少し霧が深かった様です。私は玄関の石段に腰をかけて、川向うの、不透明な夜の街を見降しながら、物思いに沈んでいました。私が何を考えていたか？——これも話の順序ですから申し上げますがね。私は例の、偽郵便函事件……そうそう、『赤ペンキを買った女』と確かそんな題で誰かがあの事件を小説にしましたぜ。あの事件を私は考えていたのです。あなたはあれをどう思いかは知りません。しかし、私の弁護は九分九厘まで成功してしました。もし、あの伊右衛門という爺さんが、ひょこひょこ出て来なければ、陪審員は一人残らず無罪を答申したに違いありません。否、私なぞは、あの偽の郵便函は運転手の策動に依る詭計じやないかとさえ疑った程、あの青年の潔白を確信していました。そうでしょう、街角に偽の郵便函を立てて被害者を誘うなんて、そんな空想的な犯罪が、実行に移せたと誰が考えるでしょう。まるで夢の様な話です。とりとめがなくて、お伽噺の様です。けれどもあれは、考えて見ると、自動車を運転する人間の心理をぎゅっとかみ出しています。自動車を動かして道を行く人の微妙な心の動きを、敏捷に把握しています。そこに現実味があるのです。実現の可能性がそこにあったのです。私はそれを思いながら、……昨夜ですよ。怖ろしいと思ったのです。玄関の石段に腰を降して、重たい夜を見詰めながら、この素晴らしい犯罪は、決して